

『兄弟サンドイッチ ～媚肉の宴～』

著：秀 香穂里

ill：黒田 脩

「龍一くん、こんにちは」

「……っす」

大柄の男が目だけで挨拶する。伏埜彰仁は彼のそんな態度にはもう慣れっこだから、笑顔で彼の隣にある椅子に腰掛ける。彰仁は大学二年生の二十歳。誕生日をこの前に迎えたばかりで、いよいよこれで自分も大人の仲間入りだと思えば胸がはやる。

目の前にいるのは、御堂龍一、十七歳の高校二年生だ。三か月前から、彰仁は家庭教師として彼に英語を教えている。大学でも英文科で学んでいるので、龍一に教えつつ、自分でも勉強している。家庭教師になったきっかけは、同級生の口コミだった。

『知り合いに、英語の家庭教師を探してるひとがいるんだ。授業料も結構いいぜ。彰仁、おまえやってみる？ この間、バイト先の喫茶店が突然店を畳んだって言ってたじゃん』

そうなのだ。九州の実家を出て東京でひとり暮らしをしている彰仁だが、仕送りだけでは少しきついので、講義のあとはアパート近くの喫茶店でアルバイトをしていた。のんびりとしたいい仕事だったものの、店主に病気が見つかり、おそらく長期療養になるとの話で、店を閉じることになったのだ。

すぐに、次のアルバイトを探さねばと彰仁は焦っていた。男にしては細身で目も大きめ、対してくちびるはちいさめで整った顔立ちの彰仁ではあるが、引っ込み思案なところもあるので、派手な仕事は向いていないと思っている。

そこへ、ちょうど家庭教師の話が舞い込んできて、彼はすぐさま飛びついた。英語なら得意分野だし、以前にも、小学生の勉強を見てやったことがある。

真面目に、誠実に、熱心に。この三つを守れば、生徒の学力はすぐに上がる。そう信じて、御堂家を訪れた彰仁は、高校二年生にしては男っぽい龍一に内心ちょっと怯んだ。

ひと言でたとえと、龍一は大型犬だ。それも、鋭い牙を隠し持っているような獰猛さがある。まだ若いからだろうか。無愛想で、一度も笑顔を見たことがない。逞しい体躯をしており、胸板も厚い。足も驚くばかりに長く、なにも知らなかったら野生味を売りにしたモデルかと思うほどだ。龍一が発散する威圧に負けたら家庭教師は務まらない。とはいいつつも、いつも、彼の部屋に入る前にはこっそり深呼吸して気持ちを高めている。

「龍一くん、今日は僕がテキストを作ってきたんだ。これを訳すところから始めてみようか」

「難しそうだな」

テキストを見るなり、龍一は顔をしかめる。

「大丈夫。ひとつひとつのセンテンスは短めにしてあるよ」

教科書や参考書だけの授業では単調だろうからと、昨日ひと晩かけて作ったテキスト用紙を机に向かう彼の前に出した。

「時間は十五分。できるだけ正確に訳してみてください。はい、スタート」

毎週水曜の夜八時からの二時間、こうして龍一と過ごす。

パン、と両手を打つと、龍一はちらっとこっちを見てテキストにシャープペンを走らせる。彼の様子を見守りながら、彰仁は龍一の室内をこっそり見回した。

八畳ほどの部屋に、机と椅子、セミダブルのベッドがある。クローゼットは造り付けのようだ。男子高校生としては、きちんと片付いているほうではないだろうか。壁には海外のサッカー選手のポスターが貼られている。飾りはそれぐらいなもので、あとはすっきりしている。ベッドの片隅に、パジャマ代わりらしいTシャツとハーフパンツがくしゃっと丸めて置かれているのを見て、年相応を感じて、ちいさく微笑んだ。

「先生、できた」

「え、もう？」

慌てて腕時計を見ると、まだ十分も経っていない。

龍一から用紙を受け取り、チェックする。完璧だ。繊細なニュアンスの文章も、最適な言葉に置き換えている。

「すごいね。もうちょっと手子ずるかと思ったけど、百点だよ。ううん、百点以上かも」

「……先生の教え方がうまいから」

言って、ふいっと顔をそむける龍一は照れ屋らしい。そんなところもなんだか好ましくて、「じゃ、教科書を開いて。授業より先を行こう」と言った。

すると、龍一は目を眇め、狙い澄ましたように言う。

「——今日は、俺からリクエスト。教えてほしいことがあるんだけど」

「うん、なに？」

龍一が顔を寄せてきて、そっと耳元で囁く。

「セックスの仕方、教えてくれよ」

「……な、……っ」

艶やかな低い声は、大人の男のそれみたいだ。

セックスという言葉にびくっと身体を震わせると、龍一は可笑しそうに肩を揺すって笑う。余裕たっぷりといった彼を見るのは初めてだから、胸が高鳴る。なんだか、龍一のほうが年上みたいだ。

「まさか経験なしってわけじゃないだろ？ 俺に手取り足取り教えてよ」

「なんで、そんなこと——……僕が……だいたい、きみはまだ高校生だろう。そんな……セックスとか、早いと思う」

「早い遅いの問題じゃないだろ。逆に、なにも知らないで大人になるほうが怖くねえ？ 間違った知識で相手を傷つけたらどうするんだよ。正しいマナーを覚えることも大事だと思うんだけど」

「それは、そうかもしれないけど、……だけど、僕も、きみも男だよ。セックスなんてできるわ

けがない」

語調が荒くなるのは致し方ないことだ。

セックスなんて、できるわけがない。してはいけないのだ、自分みたいな人間は。

——呪われた身体だから。

右腕で左腕をぎゅっと掴み、熱っぽい視線を向けてくる龍一から顔をそらした。

「相談する相手を間違ってるよ。僕は……役に立たない。その、彼女に訊くとか」

「……彼女がいるわけねえだろ。こんな可愛い奴を前にしてるのに」

ぼそりとした声が低すぎて聞き取れず、「なに？」と訊いたのだが、「なんでもねえよ」とあしらわれた。

「男同士だってセックスできるだろ。孔、ちゃんとあるんだしさ」

直接的な言葉に、かっとな顔が熱くなった。顔どころか、耳まで熱い。

絶対に、絶対にできない。セックスとは無縁の一生を送るつもりなのだから、煽るようなことを言わないでほしい。

「きょ……、今日はもう帰る」

テキストをかき集めると、「待てよ」と龍一が腕を掴んで引き寄せてくる。あまりに強い力だったから身体のバランスを崩し、「あっ」と龍一の胸に倒れ込んだ。

「な、なに、龍一くん……っ、ん……！ んんう……！」

片手で彰仁のうなじを強く掴み、もう片方の手でちいさな頤をつまむと、龍一は噛み付くようにくちづけてきた。最初から容赦ないキスでくちびるを何度も噛まれて、彰仁は涙を滲ませながら彼の胸を必死に叩いたが、逆に押さえ込まれてしまう。

「っく……ん、……は……あ……っ」

しかも、ただくちびるを重ねるだけではなかった。息苦しさに喘ぐと、ぬるりと肉厚の舌がもぐり込んでくる。龍一の舌は彰仁の口には少し大きいようで、唞内を蹂躪されると苦しい。

「ん、——っん……ああ……りゅう、いち、……く、……っ」

熱い唾液がたっぷりと伝ってくる。舌を深く搦め捕られてちゅくりと吸われ、呪わしい身体を中心にじいんと熱くなっていく。まさか、男とのキスで感じるはずがないと思いたいのにも、身体は違らしい。龍一の情熱的なキスに、口ではとても言えないような場所が、とろりと溶け崩れていく錯覚に陥る。

——どうしよ……気持ちいい。こんなキスをされたら、おかしくなる……。

「キスだけで感じるのか。先生、可愛いぜ。自分がどんな顔をしてるか、わかってねえだろ」

「どんな、顔……？」

「男を誘ってる顔だよ。邪魔な服をひん剥いてめちゃくちゃに犯してやりたくなる」

鼓膜に向けて色気のある声で囁かないでほしい。凶悪な高校生だ。たったひと言ふた言で彰仁の自由を奪い、強烈な抱擁で虜にする。

「だめ、だ……絶対、だめ、……」

墮ちるわけにはいかない。快感に煙る頭を必死に振り、彼の胸に手をあてがった。抵抗されるのも計算の内に入っていたのだろう。龍一はふっと鼻で笑い、いきなりジーンズの前立てを掴ん

できた。

「もうがちがちだ。先生のここ、どうなってるか見せろよ」

「……だめだ！」

思いきり龍一を押しつけるのと同時に、部屋の扉がロックされた。

「——龍一、先生？」

「……っ」

「ちっ、兄貴か」

龍一が舌打ちする。それから彰仁の乱れた髪を指で整え、目顔で「座れ」と言う。

力なく椅子に座り込む彰仁を見つめ、龍一は「入れよ」と扉に向かって言った。

がしゃりとノブを回して入ってきた男は長身で、怖いほどに整った造作をしている。龍一から荒々しさを取り去り、品格と鋭さを入れたら、こんなふうになるのだろう。

「勉強中にすみません。なにか揉めていたような気配があったから」

フレームレスの眼鏡をかけた御堂章吾は、龍一よりも十一歳上の兄だ。二十八歳の彼は名のあがる商社勤めをしており、スーツ姿が板についている。

龍一の勉強を見る日は、かならず挨拶に来てくれる。仕事で忙しいだろうに、十分かそこら世間話をしてくれる大人の章吾に会えるのが、ひそかな楽しみだった。これほど対照的な兄弟もなかなかいないだろう。ふたりで外を歩いていたら、さぞ目を引くに違いない。研ぎ澄まされた美貌を持つ章吾に、野性味のある弟の龍一。

そんなふたりに、内心強く惹かれていることは絶対に秘密だ。

くちびるに指を当てている彰仁を見やり、章吾は腕を組んでため息をつく。

「先生にご迷惑をおかけしているんじゃないだろうな、龍一」

「勉強でわかんねえところを訊いてただけだ。それより兄貴、帰ってくるの早いじゃん。いつもは十時過ぎなのに」

そう言って、龍一はなにかを思いついたように笑う。

「……そういや、最近水曜日は早く帰ってくるよな。先生に会いたいからか」

「そうだとしたらどうする」

大人の貫禄で龍一の言葉を弾き返す章吾は、余裕綽々だ。龍一は横柄でふてぶてしいが、章吾のような計算高さはまだないようだ。おもしろくなさそうにまた舌打ちしている。

「先生、今日はもうお帰りですか」

「あ……、……はい」

デイパックを掴んでいる彰仁に、章吾は安心するように笑いかける。

「では、車でお送りしますよ」

「いえ、まだ電車がありますし」

「この時間、電車は酔っ払いも多い。それに男性でも夜道をひとり歩かせるのは不安だ」

言葉を切って、章吾は目を眇める。それが、龍一ととてもよく似ていて、背筋がぞくりと甘く震える。その震えがなぜ甘美なものなのか、自分でも説明がつかない。

どうすればいいのだろう。章吾の誘いに乗ってしまっているのだろうか。龍一が不機嫌そうに

しているのを見ると、快諾しにくいだが、確かにもう遅い時刻だ。

「先生、兄貴の車に乗っていけよ。俺も一緒に送る」

「おまえは勉強している」

「兄貴と先生をふたりきりにしたらなにが起こるかわかったもんじゃない」

章吾と龍一が視線を交えて火花を散らす。慌てて、「あ、あの」と間に割って入った。

「……じゃあ、お言葉に甘えます。僕のアパートはここからふた駅先になります」

「わかりました。では、行きましょうか」

恐縮する彰仁の肩を抱き寄せ、龍一が勝ち誇ったような顔を章吾に向ける。しかし、章吾は鼻先で笑っただけだった。

彰仁には、けっして誰にも言えない秘密がある。一生抱えていくことになるこのつらい秘密を、誰かに打ち明けてしまっただけで楽になりたいと思った時期もあった。だが、そんなことをできるわけがない。秘密のせいで、両親も腫れ物に触るような態度だ。絶対に、真相には踏み込んでこないことが、余計に彰仁を孤独にさせた。

友人はなんとか作れるが、恋人はできない。無理だ。誰かを抱くことも、誰かに抱かれることもできない我が身が呪わしくて悲しい。セックスはできなくても、せめて抱き締められることの悦びぐらい知りたいのに。

——でも、龍一くんは抱き締めてくれた。苦しくなるぐらいに、強く。

あの一件があってから一週間後、彰仁は龍一の家に向かう前に書店に立ち寄った。個人授業まではまだ余裕がある。なにかおもしろい本を買って、気分を変えたい。

人気のミステリー小説や恋愛小説を買ったあと、書棚の下のほうに黒い背表紙を見つけた。

なんだろうと手に取って、思わず頬が熱くなった。裸の美少女が縄で縛られ、恍惚とした顔を見せられている。いわゆる、官能小説というやつだろう。大学の同級生はみんなAVを見ているみたいで、活字でエロティシズムを得ることはないようだ。もちろん、彰仁も。

好奇心にそそのかされて、ぱらぱらめくってみた。いたるところに、「ああ……っ」とか、「だめ、……悦いっ、感じちゃう……っ」と破廉恥な台詞が入っていて、刺激的だ。

こういうのも、エロ本というのだろうか。カバーをつけてもらったら、普通の文庫と変わりなさそうだ。

他人と触れ合えない身体なのだから、こういうファンタジーで己を慰めたい。AVだと、直接的すぎて少し苦手なのだ。意を決して官能小説も買い、カバーをつけてもらった。

まだ時間はある。近くのカフェに入ってアイスコーヒーを注文し、早速さっきの官能小説を取り出した。清楚な美少女が叔父と甥ふたりがかりで犯され、官能の華を咲かせていくという内容らしい。叔父は年の功らしくねっとり濃密な愛撫で、甥は若々しく荒っぽいセックスを仕掛けてくる。とても口に出せないような卑猥な言葉遣いを貪り読み、頭の底がじんわりと熱くなる。

「はあ……」

こんなセックスをしているひとが、どこかにいるのだろうか。

ちょっとだけ、羨ましい。我を忘れるような体験を自分もしてみたい。ふたりがかりというのも、スパイシーだ。セックスは一对一であるものという考えがあったから、3Pはひどく新鮮に映る。

「……できるわけ、ないか」

もぞりと身じろぎし、美味しいアイスコーヒーを飲み干す。身体の奥がしっとり濡れてきているような気がするが、努めてそこから意識を離し、会計してもらった。

十五分後には、彰仁はいつものように龍一と一緒に参考書を開いていた。

「でね、ここの助詞なんだけど……」

一週間前の出来事などなかったような真面目な顔で、龍一は彰仁の講義を聴いている。

あれは、きっとただの戯れだったのだろう。垢抜けない彰仁をからかっただけなのだ。そう思うとほっとする反面、ひどく寂しかった。

触られて秘密を知られたらと恐れるのに、興味を持ってくれたこと自体は嬉しかったのだ。大学内でもあまり目立たないし、ひととは一線を引いてつき合っているから、興味を抱いてほしいというのも無茶な話ではあるのだが。

あのときの龍一は勢いがあって、止めようがなかった。

それこそが、いまの彰仁が強く欲しているものなのかもしれない。

いやだ、だめだと言っても暴かれて、秘密を知られてなお、執拗にいたぶられて愛されたら——そう、さっきまで読んでいた官能小説のように。

「……先生、今日なんかコロンつけてる？」

「え？ いや、つけてない、けど」

「ふうん、すごくいい匂いがする」

くん、と鼻を鳴らし、参考書を閉じた龍一はどきどきしている彰仁をしばし見つめていたが、突然、「あのさ」と言う。

「今日の先生、なんか変だ」

「変って……どんなふうによ？」

「色っぽいんだよ。たまんねえよ……たまに思わせぶりなため息ついて。いい匂いまでさせて」

机に頬杖をついて、龍一は視線を彷徨わせていたが、机のすぐ横に立てかけていた彰仁のデイパックに目をつけると、それを手に取る。

「あ、……！」

止める暇もなく中を見られ、龍一がカバーのかかった文庫を取り出す。

「だめだ！」

「なに、そんな血相変えて。エロ本か？」

にやりと笑いながら龍一は文庫をめくり、目を丸くする。

「ホントにエロ本だ。あんた、こういうのが趣味？」

「趣味って……違う、今日初めて買って、たまたま書棚にあったから——なんとなくこういうのもいいかなって」

意気込んで言い募り、はあはあと息が切れる。秘密を知った龍一はにやにやし、彰仁の腕を掴

んだ。

「龍一くん……！」

「いいから、ここに座れ」

椅子に腰掛けた龍一が足を開き、その間に背中を向けた彰仁を座らせる。

そして、彰仁の首筋にふうっと息を吹きかけ、ちろりと舌を這わせてくる。

「りゅういち、……つく、ん……」

「……『おまえは感じやすい子だ。もっとここを舐めてほしいのだから？』」

それは、ついさっき目にした、小説内の台詞だ。叔父が初めて美少女を抱くときに、異様に敏感な身体だと知って驚くのだ。

文字を目にするだけでも胸が弾んだのに、龍一の低い声で奏でられると、見えない鎖で手足を縛られてしまったような気になる。

「『舐めてください』と言いなさい。びしょびしょにしてほしいのだから』」

「あ、っ、……あ……や……あ……っ」

龍一の手が、平らな胸をシャツの上からまさぐる。そこには柔らかいふくらみなどないのに、乳首をひねるようにきつく揉み込まれて、ずきずきしてくる。

「『おっぱいも悦いのか。いやらしい子だ。気持ちいいなら、そう言いなさい。でないと、やめてしまうぞ』……だってさ。やめていいのか？」

「や、や……ツン……んん、……つく、……——い、い……」

「どこが気持ちいいんだ。言わなきゃわからない。俺は出来の悪い生徒だから」

「そんな……」

目に涙をうっすら浮かべ、彰仁は肩越しに振り返ると、龍一がくちびるの端を吊り上げる。彰仁は両手でそれぞれ龍一の膝を掴んでいた。そうしないと、身体を支えてられない。

「……龍一くん……」

「言えよ。おっぱいが悦いって。言えたら直接触ってやる」

そう言う間にも龍一は彰仁の胸を揉み込む。下から寄せ上げ、手の真ん中に当たる乳首をキュキュッとねじ掴んできた。そのいやらしい指先に陥落し、彰仁は深く息を吸い込んだ。

「あ……う……ん……悦い、りゅういち、くん、……おっ、ぱい……、すごく気持ちいい……」

「……つくそ、おかしくなりそうだ。こっち向け」

「っん、——……ンっふ……ん、んっ」

顎を掴まれて舌を挿れられた。彰仁の舌をしゃぶるようにし、龍一は唞内を荒々しく舐ってくる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>